

元気な子牛を迎えるために!! —分娩前後の管理が重要です—

家畜共済事故現況で胎児等死廃事故件数が平成20年4～12月に254件（平成19年度338件）あり、高山子牛市場1開催分の頭数です。このうちの何割かの命を救うために分娩前後の管理を見直しましょう!!

1. 分娩への立会いや看護ができる昼間に分娩させましょう!!
2. 分娩房を活用してストレスのない清潔な環境で分娩させましょう!!
3. 分娩前には母牛の栄養要求量に見合った飼料を給与しましょう!!
4. 分娩兆候を見逃さず、分娩が開始したら必ず立ち会いましょう!!
5. 子牛が誕生したら、まず呼吸を確認しましょう!!
6. 呼吸を確認したら、濡れた子牛の体を乾燥させましょう!!
7. 臍帯部からの細菌の侵入を防ぎましょう!!
8. 子牛の「腹を冷やさない」ように保温をしましょう!!
9. 子牛が起立したか、初乳を飲んだかをその目で確認しましょう!!

これらのテーマについて次ページから説明があります。

飛騨家畜保健衛生所

TEL(0577)33-1111 FAX 32-9019 E-mail:c24508@pref.gifu.lg.jp

ご不明な点は、市町村担当者、獣医師もしくは家畜保健衛生所までご相談ください。

1. 分娩への立会いや看護ができる昼間に分娩させましょう!!

昼間分娩とは、分娩する牛に、分娩予定日の2週間ぐらい前から1日分の飼料を夕方一度だけ給与して、翌朝食べ残した飼料があれば取り除き、夜間だけ食べさせるという方法で、牛の分娩を昼間（朝6時から夜9時）にする確立が高くなります。このとき、水や鉱塩は自由に給与します。

2. 分娩房を活用してストレスのない清潔な環境で分娩させましょう!!

分娩房とは、一頭ごとの単房で、畜主が個別に母牛を観察・飼養管理でき、母牛にストレスがなく、その行動や寝起きを制限しない程度の広さ（1頭あたり4.5m四方あれば十分）がある清潔な場所をいいます。群飼養の場合には、1頭あたりの広さは十分とり、飼槽は全頭が同時にゆったり食べられる長さをもたせ、水場は待たないでも水が飲める数や大きさを確保した清潔な場所をいいます。

分娩予定日2週間ぐらい前から分娩房に移動して飼養します。母牛を移動する前には、分娩房の清掃・消毒を必ず行ない、敷料をたくさん入れて清潔な環境を作ります。

母牛や分娩房が汚れていると、新生子牛の下痢発生率が高くなります。母牛にとっても生まれてくる子牛にとっても快適な環境であることが重要です。

3. 分娩前には母牛の栄養要求量に見合った飼料を給与しましょう!!

分娩前の母牛管理（増飼）とは、分娩2カ月前は胎子が急に大きくなるため、分娩後の安定した泌乳量を確保するため、母牛に対する飼料給与量を徐々に増やすことをいいます。また、妊娠後期は水分要求量も増加するので新鮮な水を自由に飲水できる環境にします。なお、飼料給与量を増やすにあたり、ルーメンpHの急激な変動を避けるため、徐々に増やすことを心掛けてください。

参考：雌牛に必要な養分量（日本飼養標準2008）

項 目	維持雌牛体重(kg)				妊娠末期 2カ月	泌乳量 1kg当たり
	400	450	500	550		
DM(kg)	5.53	6.04	6.54	7.02	1.0	0.5
DCP(g)	441	479	515	551	212	97
TDN(kg)	2.76	3.02	3.27	3.51	0.83	0.36
カルシウム(g)	12	14	15	17	14	2.5
リン(g)	13	15	16	18	4	1.1
ビタミンA(1,000IU)	17.0	19.1	21.2	23.3	※	※

※体重1Kgあたり33.6IU

4. 分娩兆候を見逃さず、分娩が開始したら必ず立会いましょう!!

あなた自身の生活の糧となる子牛の誕生です。母牛のそばで見守りましょう。次のような場合には難産の可能性がありますので、速やかに獣医師に往診依頼してください。

- ・ 強い陣痛があり2～3時間経過したが、破水なし
- ・ 一次破水後1時間経過したが、足胞なし
- ・ 足胞が見えてから2時間経過したが、生まれにくい
- ・ 前肢が現れるのに鼻端がみえない
- ・ 肢が1本しか見えない
- ・ 前肢が見えないのに鼻端や頭部が出てきた場合

5. 子牛が誕生したら、まず呼吸を確認しましょう!!

誕生した子牛の心臓の鼓動はあるが呼吸困難や呼吸をしていない場合には蘇生を実施します。蘇生の方法には、羊水吐出、人工呼吸、ショック療法等があります。

・羊水吐出

(ゴロゴロした音が喉の辺りで聞こえる場合に行ないます。)

＜方法の一例＞

直ちに子牛を吊り下げ、重力を利用して気管内に吸引されていた粘液を排出させます。その際、子牛の両後肢を持って、頭部が牛舎の床から離れるくらい吊り下げるか、柵などを利用して股関節を曲点として、「へ」の字のようになるように宙吊りにします。粘液が排出されたらただちに横臥位にします。

※吊り下げを長時間続けると横隔膜が圧迫されて、かえって呼吸が妨げられる場合があるので注意が必要です。

※気管内に粘液がないことが確認できた後、まだ呼吸開始をしない場合には、鼻の穴の中に藁を入れてくすぐってみましょう。

(多くの場合、これで頭を左右に振り、くしゃみし呼吸を開始します)



・人工呼吸

(羊水吐出を数回繰り返しても呼吸が開始されない場合に行ないます)

人工呼吸によりたいいの場合、2～3分以内に蘇生しますが、蘇生に5～10分かかる場合もあります。心拍の感知できる限り、繰り返し実施しましょう。

<方法>用手人工呼吸法

- (1)子牛の左側を上にして頭部を少し下がるように横臥させます。子牛の向きなりにまたがり左前肢の前腕、前管を右手、左手で把握し、子牛の胸廓を大きく開くように持ち上げ、そして閉じる、この開閉運動を1～1.5秒位の間隔で、力強く行ないます。
- (2)腹這いの状態で両前肢をまっすぐ前に伸ばし、頸を伸ばした状態で両前肢の上に頭を載せます。後ろから左右胸部の後方、特に横隔膜あたりを手のひらで1～2秒力強く押し込んだ後、これを緩める、という動作を繰り返します。

<方法>口移しによる人工呼吸法

口や片側の鼻の穴から息が漏れないように、下顎と鼻梁鼻の穴の片側を押さえ、開いている方の鼻の穴に口をしっかり押し付け自分の呼吸する速さで繰り返し息を吹き込みます。ほとんどの場合、これにより呼吸を開始します。

・ショック療法

子牛を逆さまにして鼻や口に水が入らないようにし、胸部から頭にかけて冷水をかけます。びっくりして呼吸を開始します。

6. 呼吸を確認したら、濡れた子牛の体を乾燥させましょう!!

体毛の擦り乾燥とは、体表の羊水を清潔な乾いた布で拭き取り、体を乾かすことです。

これにより呼吸を助け、胎便排泄を促す効果があります。冬季は体温低下を防ぐ意味で大変重要です。その後は、親に我が子を舐めさせます(リッキング)。リッキングにより子牛の呼吸や血液循環などの生理機能が活性化します。

7. 臍帯部からの細菌の侵入を防ぎましょう!!

細菌が侵入すると、臍帯炎を引き起こし、増殖した細菌が血流に乗って体内を移動し、後日、臓器に膿瘍を形成したり関節炎を引き起こすことがあります。

<方法>

臍とその周囲をヨードチンキで徹底的に消毒する。ヨードチンキを2～3ml臍帯内へ注入するのも良い。

分娩後、臍帯は自然に切れることがほとんどですが、稀に繋がっている場合があり、その場合には新生子牛の臍帯附着部を押さえて、約5cmのところを清潔なハサミで切除する。

出生直後から3～5日間は、臍がカラカラに乾くまで、毎日朝夕2回ヨードチンキを塗布またはスプレーする。

8. 子牛の「腹を冷やさない」ように保温を しましょう!!

乾燥した清潔な敷料を十分に敷き「子牛の腹を冷やさない」
環境で、隙間風がない場所に收容しましょう。加えて、保温
ジャケット、保温ランプ、カーボンヒーター、保温マットや
断熱マット等の保温資材を活用することも有効です。

母子同居の場合には、子牛の圧死や母牛の糞尿による子牛の
汚れを防ぐため、丸太等で子牛専用の場所を作り、その場所
の敷料をこまめに交換・清潔に保ち、そこで保温資材を活用
しましょう。

<子牛に保温が必要な理由>

子牛は体温が約39℃で生まれますが、通常生後12時間
以内に1℃前後低下します。

子牛は濡れた状態で生まれ、被毛が薄く細く皮下脂肪が少な
く、体の容積と比較して体表面積が大きいことなどから、子
牛は寒冷ストレスに最も敏感な動物です。

とくに舎内温度が8～10℃以下になると、自らの体温を
維持する力が弱まります。

9. 子牛が起立したか、初乳を飲んだかをその目で 確認しましょう!!

分娩後、子牛が自らの力で起立し、初乳を吸引する状態を確
認することで子牛や母牛の健康状態がわかります。

異常が認められる場合には、獣医師の往診依頼等の何らかの
対応ができます。



**大事なのは、
いかに分娩に立会うかです。
これにより冒頭で紹介した
死亡した子牛の何割か救われます**